

新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休業に関わる
特別支援学級・通級指導教室の対応についての緊急アンケートの結果（特別支援学級）

I 調査時期

令和2年7月1日～24日

II 調査対象者

全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会各都道府県代表全国理事

III 回答地域及び回答数

| ブロック | 都道府県・市 |
|----------|---------------------------|
| 1 北海道 | 北海道 |
| 2 東北 | 青森・岩手・宮城 |
| 3 関東・甲信越 | 群馬・東京・神奈川・千葉 |
| 4 東海・北陸 | 石川・福井・静岡・愛知・名古屋市 |
| 5 近畿 | 京都・奈良・兵庫・京都市・神戸市 |
| 6 中国 | 鳥取・広島 |
| 7 四国 | 徳島・香川・愛媛・高知・ |
| 8 九州 | 福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・福岡市 |

* 28都道府県4市 計32地区

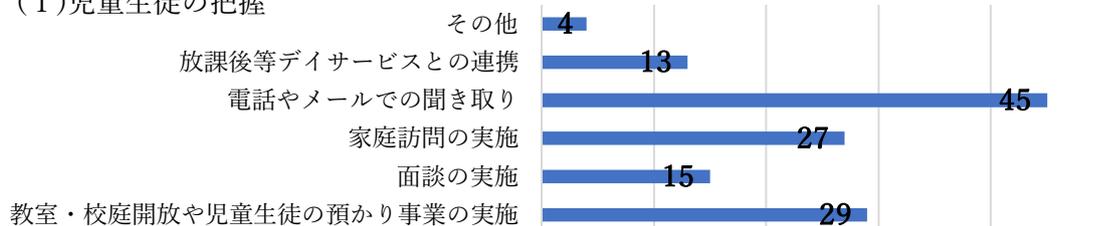
* 特別支援学級設置校61校

- ・ 回答は%で示しているもの以外は、学校数
- ・ 複数回答あり
- ・ 記述式のものについては要約した

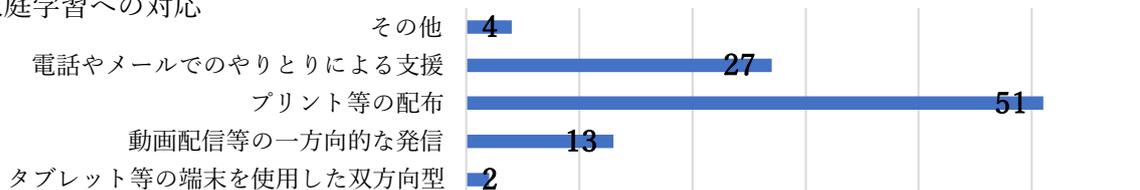
IV アンケート集計結果

1 臨時休業中の特別支援学級における児童生徒への対応について

(1) 児童生徒の把握



(2) 家庭学習への対応



(5)家庭学習の課題



(1)児童生徒の把握については、「電話やメールでの聞き取り」が61校中45校(73.8%)あり、最も多かった。複数回答が可能な質問なので、他の方法と合わせ児童生徒の状態を把握している学校が多かった。直接会って状況を確認できる方法として、「家庭訪問」が27校(44.3%)、「面談」が15校(24.6%)、「教室・校庭開放や児童生徒の預かり事業の実施」が29校(47.5%)となっている。意見欄には、子供に障害がある故の保護者の不安やストレスがあり、相談を丁寧に行ったり、関係機関につなげたり、学校に登校させたりした記述があった。約半数の学校が臨時休業ではあったが教室や校庭開放等を実施しており、家庭のみで過ごすことの難しさも伺われる。

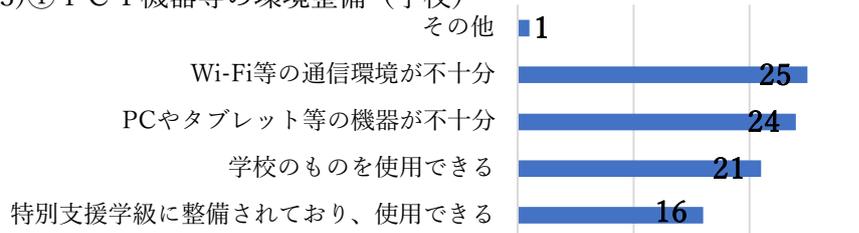
また、「放課後等デイサービスとの連携」が13校(21.3%)あり、放課後等デイサービスを利用している児童生徒が増え、学校との連携が推進されてきたことが伺われる。国の「トライアングルプロジェクト」の一貫として、今後、さらなる連携が期待される。

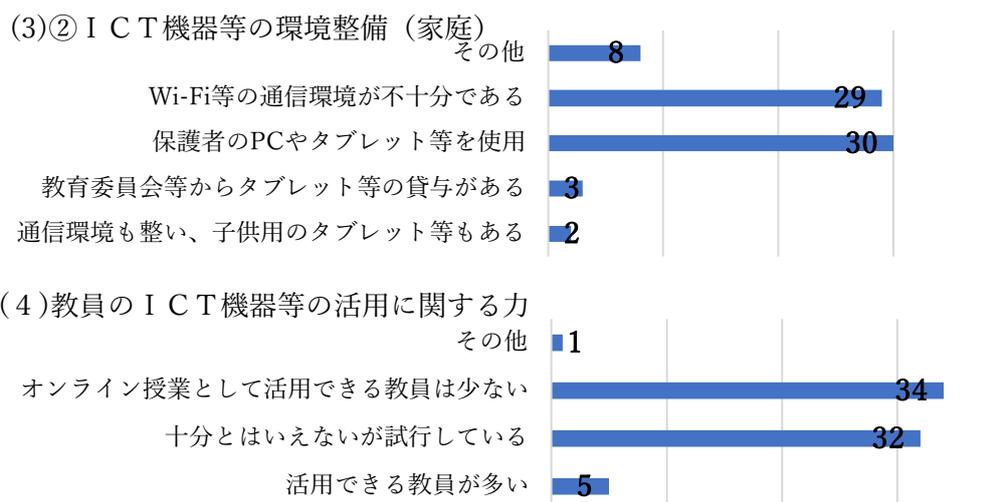
(2)家庭学習への対応については、「プリント類の配布」が51校(83.6%)あり、最も多かった。「電話やメールでのやりとりによる支援」も27校(44.3%)あり、プリント類を配布しただけでは児童生徒が学習に取り組むことが難しく、電話やメールでの支援が必要だったことも推測される。意見欄には、一人一人の状態に応じたプリントを作成したことや、一度に多くの課題を示すのではなく毎日の課題をメールで送信する等の工夫についての記述があった。

また、「動画配信等の一方的な発信」は13校(21.3%)、「タブレット等の端末を使用した双方向型」2校(3.3%)であり、ICT環境の不十分さもあり、オンラインでの授業は難しい状況が伺われる。

(5)家庭学習の課題の内容については、「児童生徒の状態に応じた個別の課題」が43校(70.5%)、「下学年の内容の学習課題」が22校(36.1%)であった。一方、「通常の学級と同じ学習課題」が11校(18.0%)あり、自閉症の児童生徒の中には、特に、教科等では、通常の学級と同じ学習課題を進められることが伺われる。しかし、家庭での学習への取組や時間の管理を行うには、保護者の支援がかなり必要であったことも記述されていた。意見欄には、個別に応じた課題を作成する教員の負担等についての記述があり、特別支援学級の児童生徒数は通常の学級に比べて少なくても、既成の学習課題等の活用も工夫が必要であり、個別の課題を作成することの困難さが伺われた。

(3)①ICT機器等の環境整備(学校)





(3) ICT 機器等の環境整備については、学校でも家庭でも不十分な状況が伺われる。学校においては、「Wi-Fi 等の通信環境が不十分」が 25 校 (41.0%)、「PC やタブレット等の機器が不十分」が 24 校 (39.3%) であり、(5) でオンラインによる授業の難しさの一因として、環境の未整備が裏付けられた。一方で、「特別支援学級に整備」が 16 校 (26.2%)、「学校のものを使用」が 21 校 (34.4%) であり、今後は、GIGA スクール構想により整備が進展していくことと思われる。通常の学級とは異なる ICT の活用方法が期待される所であり、特別支援学級としての活用の在り方について、各学校でも検討が必要である。

また、家庭においては、現在ではほとんどの保護者は PC やタブレット等を持っていると思われるが、子供専用のもを用意できている家庭は少ない。「教育委員会等からタブレット等の貸与がある」のは 3 校のみであった。今後、普及していくことは予測されるが、子供専用のもがないと、オンライン学習の実施は難しい状況である。

(4) 教員の ICT 機器等の活用に関する力については、「活用できる教員が多い」が 5 校 (8.3%)、「十分とはいえないが試行している」が 32 校 (52.5%) であった。長期にわたる臨時休業中はオンライン授業に注目が集まったが、感染症が収束した「ポストコロナ」段階では、これまでの対面指導とオンラインとの組み合わせのハイブリッド化に向け、活用できる教員を育成していく必要がある。意見欄には、ICT 機器の活用に優れていても授業で活用する力とは異なる、という記述もあり、特に、特別支援学級でどのように ICT 機器を活用していくかについて実践を積み上げていくことも必要である。

(6) 特別支援学級の家庭学習の提示についての工夫や難しさ

【 工 夫 】

- ・自力のできる反復学習の課題を用意した。
- ・保護者との情報交換から提示すべき課題と量を精選した。
- ・課題を複数用意し、家庭の状況により選択してもらった。
- ・一人一人の子供に応じたプリント類を用意した。
- ・個別の指導計画に沿って課題を提示した。
- ・家庭学習カードを使用した。
- ・見通しがもてるよう、「1日プリント2枚ずつ」など指示を明確にした。
- ・4コマ漫画風図解で説明した。
- ・規則正しい生活を送ることを家庭に依頼した。
- ・家庭訪問によって家庭学習を提示した。

【 難しさ 】

- ・子供が戸惑ったときに、すぐに対応できない。
- ・対面での説明ができないため、課題説明が難しい。
- ・家庭での声掛けや支援が必要であった。
- ・一学級の子供が複数学年にまたがっており、課題設定が難しい。
- ・大量のプリント等の課題を渡すことによる意欲の継続が課題。
- ・中学校では教科担任制なので、各教科の個別の課題を作成するにあたっては、自分の専門の教科以外の課題の準備が大変。
- ・家庭学習の形態が、プリントに偏ってしまう。
- ・市で、手引書を作成したが、さらにヒントを加えないと子供が理解できなかった。
- ・自学自習が困難な生徒については、学校再開後の支援が教員の負担となっている。

(7) 特別支援学級におけるオンライン学習の良さや難しさ

【 良 さ 】

- ・ICT 機器に関心がある子供には意欲的に取り組みやすい。
- ・子供の様子や反応を見ながら進めることができる。
- ・ことばや文字以外に表情等も把握できるので、対面に近い指導ができる。
- ・家庭という落ち着いた環境で学ぶ方が集中できる子供もいる。
- ・音声や映像を活用できることから、子供の興味・関心を引きやすい。
- ・視覚支援等がしやすい。
- ・何回も見られることは良い。
- ・内容によってはマンツーマンが可能。
- ・家庭という落ち着いた環境で学習できることで意欲が高まる子供もいる。

【 難しさ 】

- ・Wi-Fi 等の通信環境が不十分である家庭がある。
- ・子供が一人で操作できない場合、その支援を保護者もできない場合もある。
- ・興味あることについては集中できるが、教師側の意図に沿った使い方ができない場合もある。
- ・学年や一人一人の特性が異なり、一斉のオンライン学習が難しい。
- ・一人一人の特性に応じたアプリ等を探すことが難しい。
- ・双方向でないと質問が難しい。
- ・直接会って対面してのコミュニケーションは安心感があるが、画面上のコミュニケーションに不安感をもつ子供もいる。
- ・教師も子供もともに適応できるのか不安。

2 学校再開後の特別支援学級や児童生徒への対応について

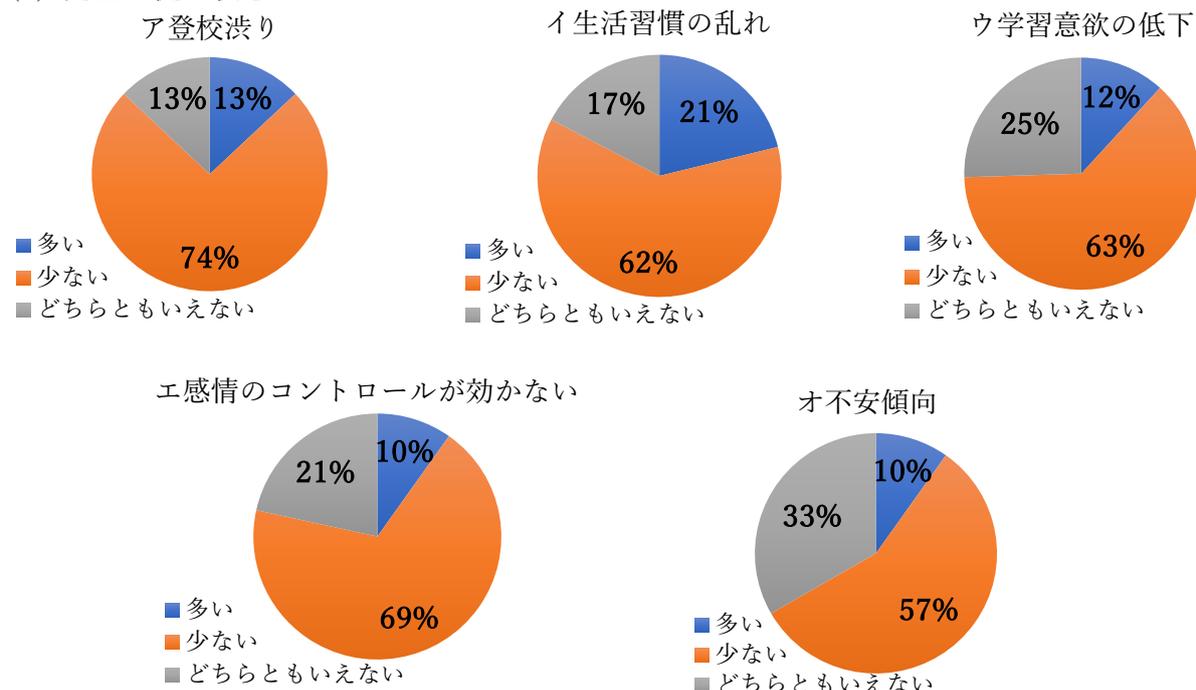
(1)分散登校の形態



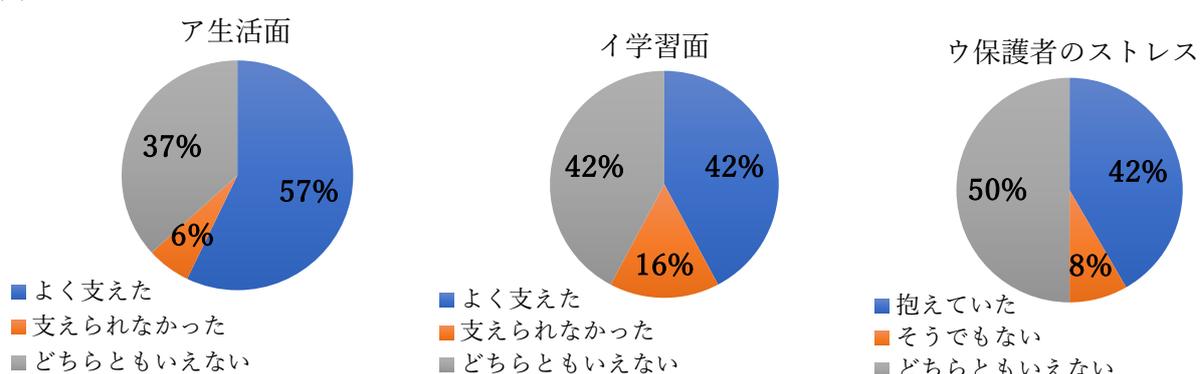
(2) 学校再開後（分散登校中を含む）、感染等が不安で学校を欠席する児童生徒はいたか



(3) 児童生徒の状態



(4) 家庭の状況



学校再開後の児童生徒には様々な面で不安定な状況が見られることが報告されているが、障害のある児童生徒についても、長期にわたった臨時休業や不安な社会情勢、変化した生活習慣による影響が懸念される場所である。(3)児童生徒の状態では、『多い』『少ない』の数値や割合を設定することが難しく、回答者の実感として回答してもらったので、『どちらともいえない』の回答もあった。『多い』と『どちらともいえない』の割合を見ると、「登校渋り」は26%、「生活習慣の乱れ」は38%、「学習意欲の低下」は37%、「感情のコントロールが効かない」は31%、「不安傾向」は43%であった。この質問は、学級としてどうかという回答であり、実際の人数について回答しているわけではないが、校長として捉えた特別支援学級の児童生徒の傾向と考えられる。意見欄には、学校再開後の生活リズムに合わせることや、精神的に不安定になっていること、欠席や遅刻・早退が増えていること、学習習慣の乱れなどに対する指導に時間をかけていることが記述されていた。

(4)家庭の状況では、把握することが難しい家庭もあったとは推察されるが、「生活面」より「学習面」を支えることが難しかった。『あまり支えられなかった』『どちらともいえない』の割合が「生活面」では43%、「学習面」では58%であった。学習面については、特別支援学級の児童生徒は、家庭で、課題に取り組む場合もICTを活用する場合も、保護者の支援がないと難しい状況が反映されたことが伺われる。特別支援学級で示した家庭学習の課題の内容は、1(5)の回答にあるように、7割の学校が工夫して個別

の課題を示しているが、1(2)の回答にあるように、タブレット等のオンラインで支援した学校は61校中2校であり、各家庭が示された課題に取り組むための手助けは難しかったことが伺われる。

そういった学習面での支援や、子供の生活習慣、新型コロナウイルスに対する先行き等への不安からか、保護者がストレスを『抱えている』『どちらともいえない』が、58%となっている。意見欄には、保護者から電話や面談による相談が多かったり、子供が1日中在宅しているストレスから登校させることにしたりしたという記述があった。

(5) 家庭の状況に応じて相談を受けたり、支援の手立てを講じることがあったか。

- ・定期的に学校で学習することで、基本的な生活習慣の定着を図った。
- ・子供が学校に行けないことで不安定になる事も多く、登校させた。
- ・保護者の不安解消となるように関係機関やSC, SSW等の協力を得た。
- ・学級通信を発行したり、個別連絡(電話)、家庭訪問を随時実施した。
- ・相談日を設けた。
- ・毎日、課題を作成し家庭に届けた。
- ・生活カレンダーを作成して、記録するよう指導した。
- ・子供と保護者の密度は高くなりストレスは大きくなったと思われる。
- ・電話での相談：ゲームの時間や就寝時間、食欲低下 家庭学習の量や進め方・学習習慣、子供が不安定になり病院の紹介、コロナへの漠然とした不安、学校再開後の学校の対応

(6) 年間指導計画の変更について

【年間指導計画の変更等の工夫】

- ・学級園を活用した活動や図画・工作等の活動が多くなっている。
- ・年間指導計画を見直し、変更した。(行事の精選、時間数の削減 学習時期の入れ替え)
- ・自立活動や道徳の授業については、子供の実態に応じて変更をした。
- ・音楽は、歌唱を控え、演奏やリズム打ち等に変更している。
- ・個別指導計画の見直し
- ・自立活動の位置づけを教科指導と関連づけてたりしながら工夫
- ・交流及び共同学習の計画の修正
- ・授業時間数確保が最優先ではなく、子供の実態に応じて無理のない指導計画を工夫
- ・行事のための準備がなくなり、国語や算数の学習に時間があてられ、計画が立てやすくなった。

(7) 特別支援学級として、学校再開後の指導の工夫や難しさについて

【工夫】

- ・焦らずに個別指導を大切にしながら気持ちを受け止め、安心できる状況を整えていく。
- ・感染に関する極端な認知や間違った認知が生まれぬよう、正しい情報を伝えるよう心がけた。
- ・活動のルーティン化など生活のリズムを安定させる。
- ・ウイルス対策や細菌対策など目に見えない世界を捉えた衛生指導を行う。
- ・心のケアや新しい生活様式に慣れ、安心して過ごすことを優先した。
- ・休校中の家庭での様子を聞き取り指導に生かしている。
- ・関わりを絶やさない工夫が大切。
- ・特別支援学級で少人数になることへの不安を訴える子供がおり、交流学級での活動を増やした。

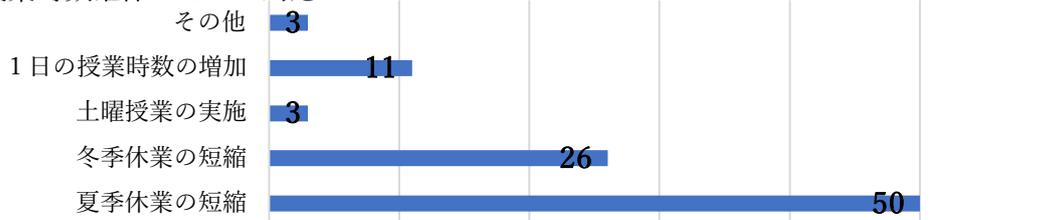
【難しさ】

- ・マスク等により教員の表情等が読み取りにくく、対人関係スキルの構築に困難さがある。
- ・自分をコントロールすることが苦手なため、再開後のリズムに合わせられない子供が多い。
- ・学校生活に慣れるということが、通常の学級の子供以上に時間がかかる。
- ・生活のリズムがくずれたり、精神的に不安定になったりして、欠席や遅刻・早退が増えている。
- ・学習の遅れや学習習慣が乱れ、集中することが難しかった。

- ・マスクの着用が苦手な子どもへの指導
- ・ソーシャルディスタンスを理解し行動することが難しい子供がいる。
- ・学校や地域の行事等の自粛により、子供の活躍できる場面が減っている。
- ・保護者との懇談がもてないので、個別の指導計画等の合意形成に困難を感じている。
- ・指導において、子供に接触しなければならない場面が多い。
- ・共有するものが多く、使用できず困った。
- ・ウイルス感染対策と熱中症対策の両方をしての学校生活で、制限が多くある。

3 教育課程の変更等

(1) 授業時数確保のための対応



(2) 学習の遅れに対する対応



(1) 授業時数確保のための対応は、学校全体に合わせ、「長期休業の短縮」で対応している学校が多い。「1日目の授業時数の増加」が11校（18.0%）ある。意見欄に、過度の負担にならないかという心配や、これまでの日常生活との違いから慣れることに時間がかかることなどの記述があった。

(2) 学習の遅れに対する対応として、「補助員等の配置」が14校（23.0%）、「放課後等の補習の実施」が9校（14.8%）、「補助教材の配布」が7校（11.5%）であった。「その他」に含まれるのは、指導計画の見直し、次年度への移行、宿題の内容や量、授業展開の工夫等であった。オンライン学習の継続も3校では、実施される予定となっている。

(3) 行事等への対応

- ・変更がある場合は、見通しがもてるように早くから丁寧に説明をする。
- ・必要な行事は時期を変更して対応する。
- ・水泳指導については、支援員を増員する。
- ・行事で手をつないでの移動手段を必要とする子供への対応を工夫する。
- ・季節の行事など学級独自でできるものを計画している。
- ・なるべく校内で楽しい授業を行い、学校に来るのが楽しいと思わせるようにする。
- ・通常学級の生徒との交流機会が減っているので、意図的に交流学級での授業や活動を増やす。
- ・行事等が中止になるので、集団参加の経験が少なくなる。
- ・行事等が中止になり、年間の学習計画も修正や行事の組み直しが必要である。
- ・学校行事等が中止され交流の機会が減り、自発性や自信、コミュニケーション力等の育成が困難
- ・例年と異なる方法で行事を行うので、不安定にならないようケアしていく必要がある。
- ・行事が少ない方が安定した学校生活を送れる子供もいる。

4 その他

(1) 3密回避の対応等、特別支援学級としての工夫

- ・パーティションやビニルシート枠の設置
- ・座席位置の変更、共有物品の削減
- ・児童にも分かりやすいコロナウイルスに関する資料、掲示物の提示
- ・テープや足型などを貼り、人との距離が自分の目で見えるよう視覚化
- ・個別スペース内で活動する機会を増やした。
- ・教師が透明マスクやフェイスシールドを使用
- ・少ない人数で学習する
- ・特別支援学級の小集団で集まる活動は当面の間中止
- ・給食の交流を中止
- ・頻繁な声かけ、手洗いのルーティン化
- ・友達との距離をとるための合言葉の使用
- ・健康観察の徹底
- ・自分たちでマスクづくりをすることを通して意識させた。
- ・交流級での授業でつき添いの教員も含め、密になり易い。
- ・感覚過敏等が理由でマスクの着用が難しい子供もいる。

(2) 感染症の理解が難しい場合や逆に感染症を恐れすぎてしまう場合への対応の工夫等

- ・担任やスクールカウンセラーによる面談の実施
- ・パワーポイントによる保健資料の活用
- ・「手1本の距離」など具体的に指示
- ・手洗いや手指消毒の声掛けを繰り返し、行動をパターン化させる。
- ・アニメや歌に合わせて手洗いができるビデオを見せたりして、紙芝居を作成したりして楽しく自然に学習できるようにしている。
- ・適切な行動様式をロールプレイを通して指導した
- ・かわいいデザインのマスクを配付
- ・手洗いをするたびにカードにスタンプ
- ・マスク着用が難しい場合は、フェイスシールドを併用
- ・正しい感染症予防のための手だてについて、教員が率先して行動することで定着を促す。
- ・マスク着用が難しい子供に対し、担任と一緒にマスクを手作りした
- ・特に不安を感じる児童生徒は、保護者の意向により出席停止措置をとっている。
- ・登校を促すことは極力避けて、家庭学習での課題提示や家庭訪問などの対応。
- ・ICT環境の整備された学校では、オンライン授業による対応。
- ・感染を過度に恐れる子供がおり、パニックになったり自分でアルコールを持参したりしていた。
- ・家庭と連携してマスクをつける練習を繰り返した

V まとめ

このような状況の中で、子供一人一人の状態に合わせた感染防止のための具体的な指導の工夫や、子供や家庭の不安に寄り添った支援等についての取組もあり、特別支援学級という学びの場で、子供の状態を把握している担任が丁寧に対応してきた状況も伺えた。また、保護者との連携を密にすることも特別支援学級の役割の一つである。しかし、ICT機器の活用に関しては、意見として「保護者の支援がないと難しい状況」あるいは「教師も子どもともに適応できるのか不安」等があることから、分散登校中の対応に差が生じた背景には、教員のICT機器等の活用に関する力も一つのポイントになっていると思われる。今後、GIGAスクール構想により環境整備が急速に進む中、障害のある子供に対するICT機器の活用についても早急に検討を深める必要があると思われる。